

ワークショップ “熱容量の解析におけるベースライン”

表記のワークショップが、1998年3月6日の午後、キャンパス内の待兼山会館で、日本熱測定学会の主催で開催された。京都工業繊維大学の猿山靖夫先生とセンターの齋藤がお世話をさせていただいた。このワークショップは「熱容量の解析にあたってベースラインを引くという行為の意味と哲学を交流し、それとともに、今後、物性科学の発展にとって熱容量測定が何を為し得るかを探る」ことを目的として開催されたものである。地味なテーマであるにもかかわらず会場がほぼ満席になる42名の参加者があり、とくに日頃、熱容量測定を行っていない参加者が見受けられたことは熱容量測定に対する潜在的な信頼感と期待を反映したものであると思われる。

話題提供者と題目は以下の通りである。(敬称略)：齋藤一弥(阪大・理)「正常熱容量をどう考えるか」、花屋 実(東工大・理)「固相間相転移における異常熱容量の分離」、朝比奈秀一(阪大・理)「液晶性化合物の熱容量解析におけるベースライン」、猿山靖夫(京都工繊大・繊維)「結晶性高分子の融解」、十時 稔(東レリサーチセンター)「高分子の場合」、西尾 豊(東邦大・理)「有機伝導体DCNQI-Cu系の特異な金属-絶縁体転移と格子比熱」、川路 均(東工大・応セラ研)「磁気相転移とショットキー型熱異常にたいするベースライン」。

内容的には、ベースラインの重要性の指摘とともに、工夫を凝らした種々のベースラインの実例やベースラインを実測する試みも紹介された。また、ベースラインの解析との関連でいわゆる“正常熱容量”の解析の重要性も指摘された。測定対象を選ばないテーマ設定とともに、できるだけ気軽な議論ができるように運営されたこともあって、活発な議論が交わされた。ワークショップ終了後、会館内で開催された懇親会でも、活発な議論が続いていた。世話人の一人として話題が室温以下に偏っていたとの反省もあるが、今後の熱容量測定による物性研究の方向の一端を垣間見ることができたようにも思う。機会を捉えて今後も議論を続けたいと思う。

(齋藤一弥)

